



第98図 磨石A類出土遺跡分布図

組成及び土器が東九州の類例と対比できる以上、刈谷我野遺跡の礫器保有数をもっと多い可能性が指摘できる。また、環状石器については九州押型文土器前後に伴う可能性が既に指摘されている(町田2003)。平成15年度調査SK 2 から環状石器が出土しているが、共に出土した土器の時間幅が広いための段階に伴うのかは不明である。しかし、鳥取県上福万遺跡よりも古く、現在のところ西日本で最古の出土例と言える(遠部2006a)。

第6節 南四国における縄文時代早期の様相についてⅡ －刈谷我野式の提唱とその意義－

これまでの学史とその問題点及び遺構については先に検討が加えられているので、そちらを参照願いたい(松本2005a・b、兵頭2006)。本節においては土器編年を構築することにより、遺跡の年代幅を示したいと思う。

西日本では押型文土器に多量の無文土器が伴うという先学の指摘(樋口1936)に従ってきた経緯があり、高知県では「不動ヶ岩屋Ⅱ式」(岡本1968)や「飼古屋Ⅱ式」(森田1983)がその指摘に従って型式設定されている。

刈谷我野遺跡における傾向は一見その指摘どおりであるが、当遺跡は新たな問題点を提示した。

①無文土器は細分できるということ、②押型文土器は細分できるということ、③細分した両者は常に併行関係にあるのかないのか、という点である。つまり、押型文土器と無文土器が細分できる以上、両者の関係について再検討が迫られることを意味する。

第6節-1：無文土器の変遷

第2節で詳述したとおり口縁部無文のA1群と口縁部有文のA2群に大別が可能であると同時に、口縁部が直立・内傾するものと外傾・外反するものが確認できる点など、そこには変遷が想定できる。

刈谷我野遺跡で出土した無文土器の起源について探る場合、南四国はもちろん中国・近畿地方を概観しても無文土器を多量に出土する遺跡は確認されていないため、これらの地方に系譜を求めることはできない。しかし、大分県二日市洞穴（橘1980、竹野・綿貫編2004）の層位及び無文土器の底部形態の変遷が読み解かれており、東九州を中心に縄文時代草創期末から縄文時代早期前葉にかけての無文土器に関する編年構築が進んでいる（綿貫1999・2003）。刈谷我野遺跡の無文土器はその編年と対比させて考えることができる。

東九州編年によると、現在のところ一番新しい型式は陽弓式とされている。この土器型式の特徴は尖底であり、胴部中ほどよりやや上の部位で最大径を有し、口縁は内傾する。これらの特徴は刈谷我野遺跡における無文土器とりわけA1群iと極めて類似する。

しかし、陽弓式には口縁部外面を中心に“こぶ”状の突起を有するものが一定量認められるのに対し、刈谷我野遺跡から出土した無文土器には一切認められない。また、陽弓式及びそれに先行する土器には口縁部文様がほとんど認められないのに対して、刈谷我野遺跡における無文土器とりわけA2群は口縁部文様を有しており、その一群が主体になることは既に指摘したとおりである。つまり、陽弓式と刈谷我野遺跡の無文土器全体の間には地域差はもちろん時間差も指摘できる。

先に指摘した“こぶ”状の突起は北九州から東九州にかけて分布し、草創期末～早期初頭の柏原式（大塚1991）を起源に持つと考えられる。柏原式に認められる口縁部下の円形刺突は長期間にわたって存続したことが指摘されており（綿貫1999），“こぶ”と刺突を合わせて柏原的技法とする見解がある（遠部2004）。

この“こぶ”状の突起は口縁部が直立・内傾する土器には必要であったものという指摘があるが（遠部2003b）、口縁が外反・外傾することによって“こぶ”状の突起を作出する必要が無くなったと考えた場合、刈谷我野遺跡の無文土器全般が陽弓式と同時期ないしは陽弓式に後続する可能性が指摘できる。また、口縁部下の円形刺突が認められず、器面調整がナデ主体である以上は刈谷我野遺跡の無文土器が陽弓式より遡る可能性は極めて低い。

現在のところ東九州で陽弓式に後続する無文土器は明らかになっていない。また、中四国地方においても蔦島式（樋口1936）とされる無文土器が型式設定されているが、その実態は極めて不鮮明であって、早期前葉から中葉にかけての様相は広島県帝釈峡遺跡群における神宮寺式の出土（矢野2003）といった断片的な遺跡の確認はされているものの、広域的にはほとんど白紙であるといっても過言ではない。このような状況で刈谷我野遺跡から出土した多量の無文及び山形文土器群は、南

四国において初めて確認された土器群であって、早期前葉でも限りなく中葉に近い時期に帰属し、その白紙の状態を打破する可能性を秘めている。

ここからA群の変遷について考えてみる。遺跡間の比較を行った場合、刈谷我野遺跡と重複する時間を部分的に有する開キ丸遺跡では刈谷我野遺跡におけるA2群cⅡ類が多数であって、他の群とりわけA1群は完全に欠落している。つまり、A1群とA2群cⅡ類の間には時間差が考えられるため、無文土器群におけるA2群cⅡ類単独の段階が存在する可能性が指摘でき、刈谷我野遺跡SK19・32（『刈谷我野遺跡Ⅰ』参照）からもそのことがうかがい知れる。そして刈谷我野遺跡平成17年度調査遺物集中1からはA2群cⅡ類とA2群cⅢ類が共伴することから、口縁部内面に左斜行文を有するものと右斜行文を有するものの間には時期差は考えられない。ただし、左斜行文が卓越するのは既に指摘したとおりである。

問題はA2群cⅠ類iである。口縁が直立ないしはやや内傾する傾向が見られ、口縁部内面にスタンプ状刺突文を有している。また、陽弓式と比べると器厚は著しく厚く、胎土に多量の繊維を混入させるといった、極めて個性的な特徴を有する。口縁部無文から口縁部有文へと移り変わり、器形が直立・内湾から外傾・外反する変遷が考えられる以上、A2群cⅠ類iは陽弓式の特徴を継承しながらも、口縁部文様という新しい要素を取り込んだ土器として解釈し、A1群とA2群cⅡ・Ⅲ類の間に位置づけるのが妥当である。ただし、A2群cⅠ類iiとしたものについては、口縁が外傾・外反しているが、胎土に繊維を多量に混入させる点と器厚が著しく厚い点を鑑み、A2群cⅠ類iと同じ時間を共有するものとして理解したい。おそらくはこの段階から口縁が外傾・外反するものが顕在化してくるのであろう。そしてA1群iiも胎土と器厚の特徴からA2群cⅠ類に共伴するものとして考えたい。

ところで外面施文の一群（A2群a類）・上面施文の一群（A2群b類）であるが、前者の口縁の傾きを観察するに直立・内湾するように見える。また、後者の口縁部の傾きを観察するに直立・内湾から外傾・外反への過渡期にあるように思える。口縁部の傾きから考えると、口縁部文様が顕在化するのはおおよそこの段階に絞られてくる可能性が指摘できる。

つまり、刈谷我野遺跡においては東九州に伝統的に見られる口縁部無文の無文土器と類似する土器が存在しており、独自に口縁部内面施文を成立させた可能性が指摘できる。その後、口縁が外傾・外反するに従って、口縁が直立・内湾していた時に内面に施されていたスタンプ状刺突文が直行文化し、それが斜行文に変遷していったとして解釈するのが妥当と考える。

第6節－2：押型文土器の変遷－山形文を中心に－

第3節で詳述したとおりに細分が可能であり、そこには変遷が想定できる。とりわけB2群b類Ⅲ種ivの位置づけが問題となってくる。これは内外に山形文を施文し、口縁部内面に柵状文を有することから黄島式ないしは早水台式と認定できる一群であるが、この群は第3層及び平成15年度調査SK2のみに比較的多い出土が見られ、第4層では主体とはならない。よって、それ以外の山形文とは明確に区別すべきであって、B2群b類Ⅲ種ivで構成される段階が存在した可能性を考慮しなければならない。

第4層ではB2群b類Ⅲ種iv以外のものが混在して出土しているため、これ以上それぞれの傾向

を層位で追うことは困難である。そこで刈谷我野遺跡平成15年度調査SK 1・17・19・32・35（『刈谷我野遺跡Ⅰ』参照）及び刈谷我野遺跡平成17年度調査遺物集中1を引き合いに出す。これらの遺構にそれぞれ一括性を認定した場合、B 2 群b類Ⅲ種は含まれないため、これらとB 2 群a類及びB 1 群とは明確に区別できる。B 2 群b類Ⅲ種 ii の内面斜行キザミは柵状文の祖形と考えられるため、黄島式ないしは早水台式に該当するB 2 群b類Ⅲ種 iv に先行させ、それとB 2 群a類及びB 1 群の間に位置づけるのが妥当である。B 2 群b類Ⅱ種に関しても、その文様構成及び器厚や胎土の特徴から、B 2 群b類Ⅲ種 ii と同じ時間を共有するとして理解したい。

次にB 1 群a・b類とB 2 群a類の関係を紐解くのに、B 2 群a類における口縁部文様の出現とB 1 群b類における内面施文の出現という現象に着目したい。つまりB 1 群a類に見られるように外面施文が基礎になればそれ以降の土器群が成立しえないことを想定したものであって、B 1 群a類（外面施文）・B 1 群b類（内外施文）→B 2 群a類（外面施文+口縁部上外面キザミ・刺突）→B 2 群b類Ⅱ種（内外施文+口縁部上面キザミ）・B 2 群b類Ⅲ種 ii （内外施文+口縁部内面斜行キザミ）→B 2 群b類Ⅲ種 iv （内外施文+口縁部内面柵状文）という変遷が考えられる。

この変遷を考えるにあたって、B 2 群b類については既述のとおりであるが、焦点となるのは口縁部文様の出現である。それについては刈谷我野遺跡SK 1・19・32・35（『刈谷我野遺跡Ⅰ』参照）から紐解くことが可能である。これらの遺構にそれぞれ一括性を認定した場合、SK 1 から出土した山形文には口縁部文様は認められない。それに対してSK19からは口縁部に上面施文と外面施文を有する山形文が認められ、SK32からは不鮮明ながらも口縁部内面に施文を有する山形文が認められる。このことはB 1 群a・b類とB 2 群a類が時期的に分けられ、B 1 群a・bがB 2 群の類より先行する可能性を示すものである。

次にB 1 群a類とB 1 群b類についてである。SK35（『刈谷我野遺跡Ⅰ』参照）では外面施文つまりa類しか確認できないため、b類とは時期差があることが考えられる。また、その施文も前面に施されるものではなく、部分的に施されている可能性も考えられる。大分県新生遺跡（栗田1984）・市場久保遺跡（長田1996）・手崎遺跡（坂本1998）では内面無文つまりa類の带状山形文が存在することが明らかになっており、これらと対比することが可能である。

第6節-3：刈谷我野式の提唱とその意義－無文土器と押型文土器の関係－

刈谷我野遺跡における炭素14年代測定においては、8600¹⁴CBP前後の値と8860～8880¹⁴CBPの値が測定されており、少なくとも2時期に区分されることが指摘されている（小林2006）。しかし、刈谷我野遺跡における遺物量の多さとその多様性を鑑みると、2時期という限定された時間ではなく、少なくとも両年代間の200～300年弱という年代幅を持った可能性を考慮したい（松本2006c）。つまり、刈谷我野遺跡の調査を今後新たに進める場合、層位・遺構を見極めてそれを十分に反映できる調査を行う能力が必要なのはもちろんであるが、8600¹⁴CBP前後の値と8860～8880¹⁴CBPの値の年代間を埋める可能性ないしはそれ以上の年代学的意義のある遺物及び炭化物が出土する可能性を十分に念頭に入れなければならないことを意味する。そして炭化物に関してはそれが人類の活動の結果である可能性が強く指摘できる以上、それらの層位を押さえた上での遺跡空間における分布の記録とそれらの年代測定は、遺跡の持つ年代幅と遺跡を残した人々の実態に迫ることを意味するの

であって、遺跡保存とそれに対する公的な説明責任という観点からも、その調査の必要と意義は十分にあることを指摘しておく。

さて、刈谷我野遺跡から出土した土器の多様性を鑑み、『刈谷我野遺跡Ⅰ』においては山形文を中心に刈谷我野Ⅰ期（SK17・35段階）→刈谷我野Ⅱ期（SK19・32段階）→刈谷我野Ⅲ期（SK1段階）→刈谷我野Ⅳ期（SK2段階）という四期区分を行った。その後、刈谷我野Ⅲ期のSK1出土遺物に再考を加え、刈谷我野Ⅰ（SK17・35段階）・Ⅲ期（SK1段階）→刈谷我野Ⅱ期（SK19・32段階）→刈谷我野Ⅳ期（SK2段階）という三期区分を提示した（松本2006d）。

これまでの2つの時期区分案において重視した点は、“山形紋盛行期”（赤塚2003）の存在と無文土器の関係性である。そして、両者の特徴とその組み合わせによって、“山形紋盛行期”が複数の段階に分けられる可能性が指摘できるようになってきた。これらの段階は黄島・早水台式に先行するものであって、“プレ・黄島式”として位置づけることができる。

この“プレ・黄島式”について、「刈谷我野式」という新型式を設定したい。これは押型文土器・無文土器といった個々の器種に対する型式設定ではなく、「様式」の概念に沿う型式設定であって、無文土器と押型文土器の組み合わせで成り立つ型式である。

この刈谷我野式は、旧稿における刈谷我野Ⅰ～Ⅲ期を包括したものであって、矢野編年1期（矢野1997）・兵頭編年Ⅰ期（兵頭2003）・山芦屋1～4期（熊谷2006）が該当しよう。尚、旧稿の刈谷我野Ⅳ期に関しては稲荷山式・黄島式・早水台式の範疇として理解し、ポジティブ楕円文が一定量を占めるために“山形紋盛行期”以降の土器群として解釈できる。よって刈谷我野式の範疇から外するのが適切と考えて除外した。

さて、圧倒的多数の無文土器と少数の山形文を主体とする“プレ・黄島式”押型文土器の組成で成り立つ刈谷我野式であるが、本報告書で細分してきたとおりに段階設定が可能であると考えており、刈谷我野式1期→刈谷我野式2期（SK35）→刈谷我野式3期（SK1・17）→刈谷我野式4期（SK19・32）という変遷案を、それぞれの遺構出土資料に一括性を認めた上で提示したい。各期のおおよその傾向とその変遷については既述したとおりである。

刈谷我野式1期に関しては、刈谷我野式2～4期から除外した無文土器すなわちA1群及びA2群b類・cⅠ類を包括する。東九州の遺跡を管見する限り、外面施文の山形文が極少量伴うと考えられるが、遺構ないしは層位からその山形文を抽出するのが困難であったため、今後の調査の蓄積とその検討に委ねたい。

そして土器の製作技術は無文土器であるのに押型文を有する器厚の厚い土器が少なからず確認された。文様は山形文に限定され、無文土器と山形文の特徴を併せ持つことから両者間に“器種間交渉”が発生したことが指摘できる。これらは外面のみに施文が見られ、口縁部内面に左斜行文を有すること及び口縁部無文のものも存在する可能性が捨てきれないことから、ある程度の時間幅を持たせて刈谷我野式2・3期の範疇に納まるものとし、刈谷我野式2・3期までを南四国における“押型文土器出現期”として理解したい。

刈谷我野式1期において無文土器が圧倒的多数の状況の中で外面施文の山形文が伝播し、それが受容される中で両者の境界が曖昧になった結果として“器種間交渉”が発生し、それ以後は山形文

を中心に押型文土器全体が増加傾向を示すことが考えられるのである。刈谷我野遺跡の絶頂期は出土数の多さからして刈谷我野式4期の段階であろう。

この刈谷我野式を器厚や胎土の繊維量などの属性に則して厳密に考えれば、その分布は南四国に限定されてくる可能性が強い。しかし、愛媛県では押型文土器を伴わない無文土器の存在が既に明らかになっており、近年の燧灘沿岸での調査・研究成果からは口縁部内面にキザミ（本報告書の左斜行文に相当）を有する無文土器に少量の押型文土器が伴う一群の存在が明らかになってきた（兵頭2005・2006）。このことは刈谷我野式2～4期と同じ段階が南四国以外にも認められることを意味する。

刈谷我野遺跡は山形文が盛行する押型文土器出現期に多量の無文土器が伴う様相を明らかにし、黄島式には全く無文土器が伴わないとは断言しないまでも、それに伴うとされた無文土器は確認できないため、黄島式と無文土器の従来のセット関係に対して再考の必要を示した。これらの様相は九州からの影響と中四国以東からの影響で成立したものではあるが、四国独自の土器文化とその社会が縄文時代早期前葉から中葉にかけて存在したことを示すものであり、先に指摘した中四国地方の空白期間を埋めるものである。今後は数々の遺跡で不明な一群とされてきた早期無文土器の存在に注視し、それを序列化する作業が必要である。

参考・引用文献

- 赤塚亨 2003 「押型紋と無紋土器の関係について（予察）」 『利根川』24・25：215-219頁 利根川同人
大下明・久保勝正 1998 「Ⅶ考察 3. 石器群の評価と問題点」 『鴻ノ木遺跡（下層編）』：238-256頁
三重県埋蔵文化財センター
大塚達郎 1991 「九州地方の縄紋草創期編年と泉福寺洞穴」 『縄文時代』2：143-154頁 縄文時代研究会
岡本健児 1968 「第一節 高知県の縄文式土器型式編年論」 『高知県史考古編』：17-71頁 高知県
遠部慎 2003a 「黄島貝塚再考」 『立命館大学考古学論集』Ⅲ：15-30頁 立命館大学考古学論文集刊行会
2003b 「九州における出現期押型文土器概観－赤塚亨氏に対するコメントにかえて－」
『利根川』24・25：220-224頁 利根川同人
2004 「九州における押型文土器出現期（予察）」 『古代』第144号：1-20頁 早稲田大学考古学研究会
2006a 「瀬戸内地域における縄文時代早期の諸問題－高知県香美市刈谷我野遺跡を中心に－」
『第17回中四国縄文研究会 早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：93-104頁 中四国縄文研究会
2006b 「瀬戸内海最古の貝塚－豊島礼田崎貝塚の再評価とその現代的意義－」 瀬戸内海研究フォーラム
木村剛郎 1978 『高知県棒原の縄文遺跡と遺物』 土佐考古学叢書1
1987 『四万十川流域の縄文文化研究』 幡多埋文研
1995 『四国西南沿海部の先史文化』 幡多埋文研
熊谷博志 2006 「智頭枕田遺跡の編年的位置付け－黄島式の成立過程について－」
『第17回中四国縄文研究会 早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：18-50頁 中四国縄文研究会
栗田勝弘 1984 『新生遺跡 野津川流域の遺跡Ⅴ』 大分県野津町教育委員会
小林謙一 2006 「AMS14C年代測定による縄紋時代草創期・早期の年代研究」
『九州縄文時代早期研究ノート』第4号：10-14頁 九州縄文時代早期研究会
小林麻由 2002 『開キ丸遺跡』 土佐山田町教育委員会
坂本嘉弘 1986 『菅無田遺跡 野津川流域の遺跡Ⅶ』 大分県野津町教育委員会
1998a 「2. 縄文時代の包含層 包含層出土土器」
『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 日田市高瀬遺跡群の調査2』
：111頁 大分県教育委員会
1998b 「東九州の押型文土器研究の現状と課題」『九州の押型文土器－論巧編－』：25-44頁 九州縄文研究会
竹野孝一郎・綿貫俊一編 2004 『大分県二日市洞穴 分析編』 大分県九重町教育委員会
橘昌信 1980 『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』 別府大学付属博物館
出原恵三 1991 『美良布遺跡』 香北町教育委員会

- 敦賀啓一郎 2006 「中国・四国地方における縄文時代早期の石器－石器組成の分析を中心に－」
『第17回中四国縄文研究会 早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：72－92頁 中四国縄文研究会
- 長田大輔 1996 『市場久保遺跡 宮原地区宅地造成事業に伴う発掘調査報告書』 大分県野津町教育委員会
- 畠中宏一 2005 「高知県の縄文時代早期－教材研究の補助資料として」 『土佐の教育 高知史学』第36号：10－20頁
高知県高等学校教育研究会社会科歴史部会
- 2006 「付編 高知県の早期について 2. 高知県の縄文時代早期遺跡について」
『第17回中四国縄文研究会 早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：111－127頁 中四国縄文研究会
- 樋口清之 1936 「讃岐高島貝塚の研究」 『史前学雑誌』第8巻1号：1－22頁 史前学会
- 兵頭勲 2000 「愛媛県における押型文土器について－上黒岩岩陰遺跡の資料を中心として－」
『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』第5号：19－48頁 愛媛県歴史文化博物館
- 2003 「四国島の押型文土器－現状と課題－」 『利根川』24・25：225－236頁 利根川同人
- 2005 「福成寺・旦之上遺跡出土の縄文時代早期の土器群について」
『福成寺・旦之上遺跡－東予玉川線地域活性化道路緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
：453－468頁 財愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 2006 「北四国地域における早期土器研究の現状と課題」
『第17回中四国縄文研究会 早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：1－17頁 中四国縄文研究会
- 2007 「押型文土器にみる縄文文化成立期の様相」『第58回歴史フォーラム縄文時代のはじまり愛媛県上黒岩遺跡
の研究成果』：24－27頁 国立歴史民俗博物館
- 深野信之 2005 『建昌城跡』 鹿児島県始良町教育委員会
- 町田勝則 2003 「押型文文化の石器を考えるにあたり」 『利根川』24・25：17－33頁 利根川同人
- 松村信博・山本純代 2001 『奥谷南遺跡Ⅲ』 高知県埋蔵文化財センター
- 松村信博・畠中宏一 2003 「南四国の押型文土器－無文土器と押型文土器をめぐって－」
『利根川』24・25：241－246頁 利根川同人
- 松本安紀彦 2005a 「南四国の縄文土器考（1）－物部川流域における押型文土器出現期について－」
『九州縄文時代早期研究ノート』第3号：36－47頁 九州縄文時代早期研究会
- 2005b 『刈谷我野遺跡Ⅰ－個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 高知県香北町教育委員会
- 2006a 「考古（縄文・弥生）編」 『香北町史』：21－44頁 高知県香北町
- 2006b 「磨石考－石巖形磨石の分布とその時期」
『第17回中四国縄文研究会 早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：51－71頁 中四国縄文研究会
- 2006c 「高知県刈谷我野遺跡の調査成果から」
『九州縄文時代早期研究ノート』第4号：3－9頁 九州縄文時代早期研究会
- 2006d 「付編 高知県の早期について 3. 刈谷我野遺跡の調査成果から」
『第17回中四国縄文研究会 早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：128－139頁 中四国縄文研究会
- 三森定男 1937 「讃岐小島遺跡の研究－押型文土器に対する考察－」
『考古学論叢』第4輯：337－373頁 考古学研究会
- 森浩一・松藤和人 1999 『加茂谷川岩陰遺跡群』 同志社大学文学部考古学研究室
- 森田尚弘 1983 『飼古屋岩陰遺跡調査報告書』 高知県教育委員会
- 八木澤一郎 2001 『上野原遺跡 第2～7地点・第10地点』 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 矢野健一 1997 「中四国地方における押型文土器後半期の様相」
『シンポジウム押型文土器と沈線文』：167－184頁 長野県考古部会縄文時代（早期）部会
- 2003 「北部九州における押型文土器出現の時期－広島県帝釈峡弘法滝洞窟遺跡出土土器の検討から」
『立命館文学』第578号：126－136頁 立命館大学文学部
- 山崎真治 2003 「南四国の「無文土器」－兵頭氏の論文へのコメントとして－」
『利根川』24・25：237－240頁 利根川同人
- 綿貫俊一 1999 「九州の縄紋時代草創期末から早期の土器編年に関する一考察」
『古文化論叢』第42集：1－39頁 古文化研究会
- 2003 「九州の縄紋時代早期前半の土器－岡田憲一氏の原稿を読了した感想－」
『利根川』24・25：206－214頁 利根川同人
- 藁科哲男 2002 「第Ⅴ章 新改開キ丸遺跡出土安山岩製遺物の原材産地分析」
『開キ丸遺跡』：35－47頁 土佐山田町教育委員会

図の出典

第87～93図：筆者実測・浄書。 第94図：3・4・5・8・9・20・25・26は『刈谷我野遺跡Ⅰ』より転載。 第95図：6・11・13・15・21・24・25・28・31～33は『刈谷我野遺跡Ⅰ』より転載。 第96図：34・35・38・39は『刈谷我野遺跡Ⅰ』より転載。 第97図：3～5・6・10・13・14は『刈谷我野遺跡Ⅰ』より転載。